

ダックスフントの進行性脊髄軟化症の10例 2011.12.18

岐阜県開業 なかはら動物病院 中原公彦

はじめに

犬の胸腰部椎間板逸脱症の症例において、脊髄の障害が重度の場合、進行性脊髄軟化症へと進行し、死の転帰をたどることがある。

今回、重度の椎間板逸脱症のため脊髄軟化症となり、死亡した犬の10例について、若干の知見を得たので報告する。

症例

症例はダックスフント10例。

すべての症例で当院来院時には、両後肢完全麻痺で深部痛覚は消失していた。

結果 (表1)

	第1 病日	第2 病日	第3 病日	第4 病日	第5 病日	第6 病日	第7 病日	第8 病日	第9 病日	第10 病日
症例 1♂	ふらつき	起立不可		DP (-)×		横臥	死亡			
症例 2	起立不可	DP (-)	横臥		死亡					
症例 3	起立不可	DP (-)	横臥	死亡						
症例 4	起立不可	DP (-)		前肢 cp↓	横臥	死亡				
症例 5♂	痛み			ふらつき	起立不可	DP (-)	前肢 cp↓	横臥		死亡
症例 6♂		起立不可			DP (-)×	前肢 cp↓	横臥	死亡		
症例 7♂	起立不可	DP (-)			前肢 cp↓	横臥	死亡			
症例 8♂		起立不可	DP (-)					前肢 cp↓	横臥	死亡
症例 9	起立不可			DP (-)	前肢 cp↓	横臥		死亡		
症例 10	起立不可		DP (-)×		横臥		死亡			

*DP (-) は、深部痛覚消失を確認した日であり、手術した日でもある。

*×は、手術を行わなかった症例である。

結果及び考察

1. 症例は雄5頭、雌5頭であり、雌雄に差はなかった。
2. 年齢は3歳から6歳3ヶ月で、平均4歳7ヶ月であり、比較的若い症例に多い傾向であった。
3. 発症から死亡までの日数は4日から10日で、平均7.2日であった。
4. 起立不可能となってから死亡までの日数は平均6.3日であった。
5. 発症から起立不可能となるまで、1日以内のものは、6例あった。
// 、2日以内のものは、3例であった。
// 、5日目のものが1例あった。
6. 診断後、直ちに減圧手術を実施した症例は、7例であった。
7. 減圧手術を実施しなかった症例は3例あり、実施しなかった理由としては、症例1と症例10は脊髄造影X線検査で脊髄軟化像を示唆する画像が得られたためであり、症例6は症状が重度の割に著明な脊髄圧迫像を示さず、脊髄震盪タイプが強く疑われたためである。

まとめ

進行性脊髄軟化症となる症例は、急激な発症状況、症状の進行の速さ、さらに圧迫病変の有無に関係なく発症、進行していることなどから、脊髄に脱出髄核が激しく衝突して脊髄に与える障害病変、すなわち脊髄震盪タイプが重度の場合に発症すると考えられた。

以上の結果から、若くて、急激に起立歩行不可能、深部痛覚消失となる症例は、たとえ早期に減圧手術を実施しても、進行性脊髄軟化症となる可能性が高いと考えられ、十分注意してインフォームドコンセントをしっかりと行う必要があると思われた。